

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アルフォンス・ドーデの<幻覚>鉄道
Author(s)	檀上, 文雄
Citation	フランス文学, 14 : 8 - 16
Issue Date	1982-05-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040931">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040931</a>
Right	
Relation	



## アルフォンス・ドーデの〈幻覚〉鉄道

檀 上 文 雄

わが国へのアルフォンス・ドーデの作品移入は、明治二十二年二月二日に読売新聞に発表された鷗外漁史の「緑葉歎」(Kadour et Kartel)をもって嚆矢とする。(富田仁『アルフォンス・ドーデと近代文学』)

それからほぼ百年経ったにも拘わらず、ドーデの全貌は解明しつくされていない。しかも「最後の授業」をめぐる諸氏による〈告発〉が発表され続けている実情である。

普仏戦争による敗戦の結果、ドイツ占領軍の命令によって、明日から、フランス語の授業が禁止される、アルザンス地方のとある小学校での、最後の授業の模様を伝える清純な感動的物語である、とするこれまでの内容紹介に対して、この短編は、ユージェーヌ皇后の勧めを受けた体制作家ドーデが、敗戦にうち沈む国民を鼓舞して、ドイツに対する敵愾心を燃えさせたことを意図して書かれた反動作品であり、しかもアルザス地方はドイツ語方言が話される土地なので全くの假空物語であると暴露されている。

このようにドーデの作品には虚実がつきまとい、その内容の真偽のほどを判定しかねるが、その理由はまず彼の〈創作態度〉によるのであり、つぎに彼の生涯にまつわる〈陰の部分〉のためであると考えられる。

ドーデは自然主義の作家に位置づけられているが、むしろ印象主義に立脚する作家で、つね日頃メモ帳を持参して、後の創作に役立つであろう事物を克明に観察して記入したが、この材料を活用するにあたっては、日時、場所を超越し、人物、事柄の相互関係を無視し、かつ伸縮自在に操作している。

Je me rappelle fort bien qu'à cette époque à Nîmes , les blanchisseuses n'ayant pas de ruisseau pour laver leur linge, dès qu'il y eut un petit chemin de fer , de Nîmes au Rhône, elles le prirent pour porter leurs paniers et leurs baquets .

Les soirs d'été , c'était quelque chose que l'arrivée de ces jeunes femmes ou jeunes filles , au teint mat et fiévreux , rentrant avec leurs paquets de linge encore tout trempé ; et quand elles sortaient de la gare , la foule attirée s'attroupait sur leur passage et humait avec délices la bonne fraîcheur de ces

masses ruisselantes, dont les pauvres Nîmois approchaient les mains brûlantes et sèches, en murmurant; Oh! d'aigo!...d'aigo...d'aigo!...(de l'eau, de l'eau, de l'eau).

—premier voyage, premier mensonge—

—読んで写実そのものと考えられるが、裏に事実を控えさせたヒクションである。

ドーデは1840年の4月13日のニーム生れであり、この年に鉱山鉄道がニーム経由でローヌ河畔に達している。ニームが夏場水に不足したのも事実である。だが鉱石運搬用のトロッコへの危険な便乗を鉄道会社は主婦たちに許したであろうか。それになによりもこの短編の真実性が信じられないのは、われわれの記憶能力は、幼時の体験を後々まで鮮明に持ち続けられないという一事である。それにドーデ一家は1849年にはリヨンに移住している。

「初旅」については次の記述になっているが、これもまたヒクションであることは前掲の文章と同工異曲である。

Nîmes est à cinq heures de Beaucaires. Nous étions venus en diligence à travers des champs d'oliviers, vignes, muriers, des plaines ondulantes sur une route où il y avait deux pieds de poussière blanche...Nous partions pour le lycée de Lyon finir nos études. Le chemin de fer commençait à fonctionner, mais il était très cher et nos parents, qui n'étaient pas riches, avaient songé à se servir des bateaux à vapeur qui remontent le Rhône.

—ibd—

ドーデ一家のリヨン移住当時、ニームからリヨンまでの鉄道連絡は全くとれていない事実だけを紹介しておく。(パリ・リヨン・地中海鉄道の開通は1855年である。)

ドーデの全貌が解明されるに至らない第二の理由である〈陰の部分〉は、その出生に始まる。

父親は絹織物の工場主であった。王制復古後、ローヌ河の下流地域に急速に興った織物成金の二代目で、気性の激しい粋な男であり、母親はニームで一二を争う織物問屋の娘で、深窓に育った上品で内気な信仰心の厚い女性であった。この二人は周囲の猛反対を押しきって、彼女の方から進んで1829年秋に結婚したが、結婚生活10年で、二人の間には多くの子供が生まれた。アルフォンスは第16子にあたると多くの伝記は伝えているが、ブルユイエール(Bruyère)はアルフォンスは第5子にあたる—ただし2名早死—と断定している。<sup>①</sup>

なぜかこの点が解明されず珍説まで発表され続けている。<sup>②</sup>

作家の出生の秘密は作品の評価鑑賞とは無関係で、ただ問題は、数はともかく、多くの子どもを産んだ母親が新生児にあたえた精神的、特に肉体的な影響であろう。アルフオンスは小柄なひ弱な子供で、両腕を伸ばした先の物が識別できる程度の極端な弱性近視に生れた。母親にとって子供の養育は無理であるからアルフオンスは里子に出された。

誕生当時は裕福だったドーデ一家に対して、〈激動の時代〉は、つぎつぎと不幸を見舞う。ここに半自叙伝ともいえる『プチ・ショーズ』（ちび）の時代が始まる。

リヨンに移り再起を図った父親の事業はことごとくに失敗し、一家は離散しても生き延びるため、父親は行商人になり母親は里に帰り、プチ・ショーズはアレスの中学校の自習監督になって赴任することになる。この赴任時期についても日仏のドーデ研究家のあいだで1855年説、56年説、57年説とおおきなずれがみられる。

③ここに里親宛の一通の手紙がある。

Bon père et bonne mère

Je suis au moment de finir mes classes . Encore six mois ou un an ,  
et je vais passer une foule d'examens sérieux à Lyon ou à Paris .  
Et vous comprendrez que je dois m'y préparer et faire tous mes  
efforts pour être reçu avec honneur. Je me destinais à la marine,  
mais j'ai la vue basse et on ne peut m'admettre parmi les défense de la  
patrie ; ma foi , tant pis .

La France n'y perd pas grand'chose et moi je crois y gagner beaucoup ;  
car , à cette heure , quoique je n'aie que quinze ans , je serais sans doute  
sous les murs de Sebastopol , ayant déjà perdu , ou étant en danger de  
perdre ma tête , ou au moins un bras et une jambe .

.....

(Georges Benoit-Guyot ; P 47)

クリミア戦争は仏英（トルコ）側が1854年3月27日にロシアに宣戦布告してから1年半に及び、セバストポール港の陥落は1855年9月8日である。この手紙は、本人が「自分は15歳」と云っているところから考えて、セバストポール港への攻略戦がはかどらず国内世論が沸騰している最中に、少年ドーデが身体強健ならば志願したいとの思いを込めて1855年の春以降に綴ったと推定される。

フランスの学校制度は昔も今も秋が学年始めである。「さらに半年ないし1年」とも述べているので、55年赴任説は成立する余地がない。

ボルネック(Bornecque)は、浩瀚な『アルフオンス・ドーデの修業時代』において、赴

任時期の決め手資料として1857年4月末にニイムの従兄弟にあてた一通の手紙を紹介している。

Lyon 24 (surchargé 25) avril 1857

Mon cher Louis

…Dans deux ou trois jours, je vais arriver auprès de vous ; si j'agis aussi promptement, c'est que le temps me presse pour mon Baccalauréat et une longue attente pourrait m'être fatale.

Alph. Daudet

「2, 3日したら訪ねます」と書かれているので、ボルネックはリヨンからニイムに立寄り、アレスの中学校に着任した日を1857年5月1日と推定している。

ところで56年赴任説がドーデ研究者のあいだに見受けられるのは、『プチ・ショーズ』作中でのアレスの生活記録が、作品全体のほぼ四分の一の紙面を占めるほど具体的に書かれているためであろうか。ボルネックによれば、学校生活は半カ年で、二カ月の夏休暇が含まれるので、僅かに4カ月の体験から物語が構成されたことになる。

ともかくドーデは、185×年×月にアレスの中学校に赴任した。アレスはニイム北方44軒、中央山系の一翼セバンヌ山中の谷合いの鉱山町である。前述の鉱山鉄道はここを起点とするフランス国内でいちばん早く建設された、ドーデ誕生当時としては、いちばん長い鉄道である。王制復古後、アレス周辺では鉱山が続々開発され、石炭、鉄、銅、亜鉛……はいずれも良質大量であるため、急遽、搬出路としてローヌ河畔まで長距離の鉄道線が建設されたのである。労務者が続々と流れこみ、町の人口は一挙に倍増した。だから生徒の多くは鉱山労務者の子供、山村の山家の猿たち、ニイムからの落ちこぼれ組である。

はじめは子供たちに親しまれたプチ・ショーズも、上のクラスに担任替えになってから年格好の同じ腕白小僧にいじめられ自殺を思い詰めるほどに苦悩していた。その時である。1857年10月×日、パリにいる次兄エルネストから兄弟力を合せて一家の再建を図ろうとの手紙が舞い込んだのだ、とは通説である。

ボルネックはこの通説を退け、学校生活は「むしろ幸福であった」と伝えている。ではなぜアレスの生活が半年ほどの短期日に終わったのか。その理由としてブリユイエールとボルネックはともに〈スキャンダルが発生した〉<sup>④</sup>と唱えている。

赴任の時期も辞任の理由も、いままで不明であった、その責任の大半は素直に少年の日々を語れないドーデに因るといえる。

「さてそこでもしも読者の皆さんがお望みとあらば、プチ・ショーズがしきりに韻をさがしているひまに、一跨ぎに彼の生涯の四・五年を飛びこえることにしよう」(『プチ・ショーズ』)

なぜこうも茶化して書くのか。素直に語れぬ事情が、少年の日に彼を襲ったのであり、

彼は辛うじて告白する。「十三歳のころ、突然、悪魔的な生活に入ったのである。それは日頃抑えられていた想像力に対する反動であった。元来繊細で臆病である彼は、その当時すでに大担に、粗暴になり、あらゆる狂態もしかねないほどに変わっていた。彼は学校の授業を怠け、毎日を蒸気船や、ハシケや曳船などの錯綜する水の上で過していた。雨のふる日でも口にパイプをくわえ、アップサンやブランデーなどの壺をポケットの中に忍ばせ、船を漕いでいた。」（萩原弥彦訳「私の作品『ちび』（ル・プティ・ショーズ）の来歴」）

反抗期の少年にとって不幸な家庭が面白いわけではなく、登校を拒否するのはまだしも、酒気をおびて麻薬に手を出したら大問題である。アルフォンスはかかる不良児に成り下ったのだ。

アップサン酒の飲用は、フランスのアルジェリア征服がもたらした大害悪のひとつで、現地では水が不足するうえに悪質なため、兵士たちは疫病予防のためアップサント(和名 ニガヨモギ)の葉を粉末にして水に混ぜて飲用していたが、後に砂糖を入れて発酵させたアップサン酒(酒類中で最高のアルコール度)を飲用した。この悪習が帰還兵たちによってフランス全土にあっという間に拡まった。特に南仏地方は降雨量がすくない。それにヨーロッパを襲った最後のコレラが1832年、1835年、1849年と漫延していた。

アップサントには覚醒作用がある。常用すれば、最初は気分爽快で軽い幻覚を覚える程度だった肉体は、しだいに蝕ばまれ精神の均衡は失われ、狂喜または憂うつになり、果ては自殺を思いつめるようになる。結局、神経系統を犯された廃人同様の姿を衆目に晒すことになる。

覚醒剤患者に成り下ったドーデは一生根治できず、神経を犯され、躁うつ病に悩まされた。⑥  
プチ・ショーズ上京の際の車内の模様は、その一面を如実に伝えているのではなかろうか。

貧しい少年が、汽車賃を払った後は持金とてなく、うら寂びた服装で、寒さに震えながら二日間飲まず食わずのみじめな旅を続けた末、パリの駅頭で出迎える兄と劇的な再会をしたのだ。

ところでパリでの作家活動を通じて文壇に遥がぬ地位を確立して、〈デイケンズの再来〉とまでに世間に言いはやされるに至るまでの過去を回想した真面目な回顧録であり、パリ文壇での交遊史でもある『パリの三十年』(1888年)の冒頭を飾る「到着」という一章に、車内の模様が同じく描かれている。

同じ旅行の思い出を綴った二つの文章で、登場人物がまったく違って書かれている。一方では、無慈悲に食べ物をはほぼる看護卒夫婦、他方では「気付け酒」をくれた善良な水兵(船員とも訳せる)になっている。

「よもや忘れることのない、三十年たった今でも思い出だけでも身震いのする」ほど

の感動をおぼえる一人旅であったのに、なぜ人物が変えて書かれているのか、スキャンダル<sup>⑦</sup>を起し、身を追われる思いでアレスを去ったドーデは、まだ車内でも興奮していたであろう。その車内は暗い。近視の彼にはなにか兵隊らしい服装をした男たちが見受けられるにすぎない。二日目の真夜、荒涼とした野原を列車が通過していた時、緊張し疲労し空腹な彼は、アルコールの禁断状態が限界に達していた。だから今列車は〈シャンパーニュ〉の平野を莫進し続けている……と空想する。

二つの文章は、彼の車内での心理状態をヴィヴィッドに描いたもので、双方の記述は嘘ではなく、一つの事実を二様に書き分けたにすぎない、と解釈できるのではなからうか。

エルネスト兄と共同生活をはじめたアルフォンスは、1858年に詩集「恋する女たち」を出版するとユージェーヌ皇后の目にとまり、じきじきの推薦で1860年にはモルニイ公爵の秘書になることができた。モルニイ公爵は、タレーランの孫にあたりナポレオンの片腕であり、1851年12月のクーデタは二人の合作である。その秘書にいちおう成れたアルフォンスにとってなんの不自由があろうか。肩書と栄誉、酒と女に、……

二三年前までは苦労を重ねていた田舎者のヤン茶坊やに絢爛豪華なパリ生活の幕がパッと開かれた。（『サフォ』を読まれたい。）

1867年には裕福なブルジョワの家庭に育った教養高い女性と結婚することもできた。妻はエドモンド・ゴンクールに文筆の才を認めさせ最大級の賛辞を呈しさせた才女である。

フローベル邸での晩餐会に招かれるゾラ、ゴンクール、トウルゲネフ、モーパッサン……のうちで、作品が版を重ねているのは彼だけである。と同時にゴンクールとは水入らずの交際がはじまる。（『ゴンクールの日記』全22巻はどんなにおおくドーデ夫妻の記事で埋められていることか。）

〈好事魔多シ〉の譬話は適中する。1880年5月フローベル死去の報に接してクロワッセに急行した車内で、沈痛の裡にあっても茶目気を発揮した彼も、この頃から神経痛の発作で治療生活を余儀なくされるようになる。

パリにいてはもつれる脚に馬車に轢かれる不安を感じ、大通りの横断さえ困難になる。庭に遊ぶ愛児の呼声に応じて歩み寄れなくなる。『ゴンクールの日記』に見られるとおりの病状である。

jeudi 9 juillet 1885

A Champrosay qu'il ne pouvait plus courir sur l'invite de Zézé lui ayant cri ; 《 Papa, cours après moi ! 》

Quand il traversait un boulevard et qu'il voulait éviter une voiture, il lui était impossible, tout à fait impossible de courir.

mercredi 23 mars 1887

Soirée chez les Charpentiers, Daudet obligé d'aller se faire faire dans une chambre une piqûre de morphine par son fils.

神経科の専門医シャリコ博士の荒治療にもよく堪えただけでなく、自分の病苦を冷静に見つめ『苦痛』執筆の筆を1885年に取りはじめたその彼が、ゴンクールによれば(1885年10月11日の日記)、一緒に帰路につく車内で、激痛の発作するあい間あい間に、苦しかった幼少年時代を回想した彼の姿を想像して、われわれは一抹の涙を誘われまいであろうか。

イギリスのある女性作家は、この日記に次のように注釈を加えている。

He was never heard to rail against his fate. It was one of his unshakable convictions that all judgements are served and all sentences worked out on earth.

(G,V,Dobie; P.244)

原因あっての結果であって、万事を「因果応報」と甘受して病苦に堪えたドーデは、偽善者、「嘘つき」であったのであろうか。小説に虚構はつきものである。これなくして創作活動は不可能である。逆境にあっても僻まず挫けず、人々の善意を信じて天性の明朗さを努めて持ち続けた一人の作家が、一連の滑稽物を創作したためか、ホラ吹き嘘つきと誤解され続けており、作品が移入されてからほぼ百年経った今日に及んでもその全貌が解明されず、告発騒ぎが起きているのも、ドーデ自身が〈陰の部分〉に対する言質を与えなかったためであるといえよう。

ボルネックは、ドーデ伝説は関係者(エルネスト、レオン、ルシアン・ドーデ)によって脚色され続けたと述べている。

フランス政府は、1915年以降アブサン酒の製造を厳禁している。それほどにこのリキュールの飲用が「世紀末」の芸術家たちに弊害を与え続けた後の、苦汁をなめさせられた末の政府決定であった。

今日一般に市販されているリキュールで、特異の芳香と苦みをもち、暗緑色で、水を加えると白濁する酒精分の強いフランス製の「安酒」であるペルノオ(Pernod)やリカール(Ricard)は、原料を変え、当時のままの味と香りを残すように製造されているアブサン酒の模造品であることを紹介しておく。

参考文献:

Jacques-Henry Bornecque; Les années d'apprentissage d' Alphonse Daudet. 1951

Marcel Bruyère; La jeunesse d'Alphonse Daudet. 1955

Georges Benoit-Guyod: Alphonse Daudet. 1947

Lucien Daudet: Vie d'Alphonse Daudet. 1941

G.V.Dobie: Alphonse Daudet. London. 1949

注

- ① ブルユイエールによる家系図には、アルフォンス兄弟全員の生年時と、死亡時が具体的に記入してあるが、ボルネックによる家系図には生存者だけが掲示されている。
- ② 珍説の一例。「この平和な貿易商の夫妻は、17人の子どもをもったよい子持である。そのうち死んだのは3人だけで、ドーデはその三番目の男の子である。」(波多野完治:『創作心理学』大日本図書 p.207)
- ③ アレス1855年赴任説の遠因は、「19世紀ラルース大事典」(Grand dictionnaire universel du 19<sup>e</sup> siècle) 1870年版にあるともいえる。

Daudet[...]se fit d'études à Alais, et exerça pendant deux ans cette profession. Puis il vint à Paris, en 1857.

- ④ フレドリック・ミストラルによれば、アレスの生活は「全く楽しかった」よし。(ブルユイエール.P.166)
- ⑤ Alais, 24 octobre 57

Mon cher Louis, ma bonne Octavie .....

Je suis forcé de vous quitter pour corriger un peu mes chers élèves qui se permettent de tapage.

Alphonse Daudet

Cette lettre constitue le dernier document certain que nous possédions avant que Daudet quitte le Collège pour Paris: coup de théâtre qui devait décider de toute sa vie.[...]en admettant que l'affaire se soit déclanché dès le 25, c'est en quatre jours, peut-être trois que le scandale a muri, puis crevé.

Scandale? [...] Le bon chef paternel cacha longtemps les peccadilles du petit maître d'études, mais celui-ci ayant fait scandale, paraît-il, dût retourner à Nîmes.[...] Alphonse Daudet n'a jamais éclairci les circonstances de son départ.

(Bornecque; P.95.96)

- ⑥ Alphonse Daudet représente le type psychologique que les médecins appelleraient aujourd'hui un cyclothymique. (Bornecque; P.512)
- ⑦ 『プチ・シヨーズ』作中のブーコラン事件，艶書の代筆，カフェ・バルベットへの日参がスキャンダルの発生と関連あるのではなかろうか。

(鈴峯女子短期大学教授)